

## イギリスのドラマ教育の考察 (4)

—Gavin Bolton の検討を通して—

小林 由利子

### A Study of Drama in Education in England (4)

— Analysis of Gavin Bolton' Theory and Method —

Yuriko KOBAYASHI

#### Abstract

Gavin Bolton is one of the best drama educators and researchers in England. Bolton is influenced by Dorothy Heathcote who is a well-known leader of Drama in Education in the world. This paper analyzes Bolton's theory and method of drama in education. I clarify his purpose of drama activities through his writings. His drama is not an exercise or a game which is like drama of Peter Slade and Brian Way. His drama is concerned with change of insight or understanding.

Key Words: Drama in Education, Gavin Bolton, Dorothy Heathcote, Dramatic Play, Drama

キーワード：ドラマ教育，ゲブン・ボルトン，ドロシー・ヘスコート，劇的遊び，ドラマ

#### I. はじめに

『川村学園女子大学研究紀要』（1995）第6巻第2号の「イギリスのドラマ教育の考察（1）— Dorothy Heathcote の方法論の検討を通して—」<sup>(1)</sup>において、拙者は現在のイギリスだけでなく世界のドラマ教育に多大な影響力をもつ Heathcote の方法論について検討した。今回は、Heathcote と長年研究と実践を共に行ってきた Gavin Bolton<sup>(2)</sup>を取り上げ、Bolton のドラマ教育の方法論の特徴を明らかにしていく。Bolton を取り上げた理由は、次の3つである。第1に、現代のドラマ教育において、Bolton の方法論は、Heathcote の方法論と共に最も影響力が

ある方法論として認知されているからである。第2に、Bolton自らが<sup>3</sup>、Heathcoteを「師(mentor)」と尊敬し、Heathcoteの方法論を継承しているからである。第3に、Boltonがイギリスのドラマ教育の先駆者であるSladeの方法論<sup>(3)</sup>とSladeの後継者であるWayのドラマ教育の方法論<sup>(4)</sup>について痛烈な批判を行っているからである。

本論において、Boltonの著作を検討することを通して、Boltonのドラマ教育の方法論の特徴を明らかにしていきたい。

## Ⅱ. 従来のドラマ教育に対する批判

Boltonは、ドラマ教育における従来のドラマ活動を「エクササイズ(exercise)」と「劇的遊び(dramatic playing)」と「演劇(theatre)」という3つの基礎的タイプに分類して考察している。

第1の「エクササイズ」というドラマ活動は、(1)「直接的経験」、(2)「劇的技能練習」、(3)「『ドラマ』エクササイズ」、(4)「ゲーム」、(5)「他の芸術様式」という5つの下位項目に分類できるとBoltonは述べている<sup>(5)</sup>。(1)の「直接的経験」とは、「実際に地下貯蔵室に行くこと、実際に道端で人にインタビューすること、魚市場で働く人観察すること、外の通りの音を聞くこと、ペアになり一人がもう一人の上に座り立とうとするのを止めようとする、『リラックス』や『柔軟』あるいは『集中』などのエクササイズをすること、ドラマのビートに合わせてスキップすること」<sup>(6)</sup>などである。(2)の「劇的技能練習」は、「カビ臭い地下貯蔵庫においてを思い出すこと、リチャード三世の歩き方を考えやってみること、外の通りの音を想像して、(実際にあるいは想像して)刀を振り回した後『勝利』『打倒』『復讐』『無実』『平和の完敗』と言ってみること、司祭の役のために発音を練習すること、『国王による布告』の準備のために語彙と表現様式を選択すること」<sup>(7)</sup>などである。(3)の「『ドラマ』エクササイズ」は、教師が『そして、あなたは自分が暗い地下貯蔵庫にいることに突然気がつきます……湿っぽい匂いがして寒気を感じます……わたしがタンブリンを鳴らすと、あなたは何かを隅っこのほうで光っているを見つけます……あなたはちょっと躊躇します……あなたはそばに近づいて行きます』云々というナレーションをする、ペアになり一人がインタビューする人になりもう一人がインタビューされる人になり質問をしてみる、ある娘が家を出たがっている・父は許可しない・母は許可するという状況でこの問題についてそれぞれのグループでどのように関わるか見つけ出すこと、教師が『ハーメルンの笛吹き』を読んだ後にその物語を劇化するように言い、そしてその物語で起きたことすべてを覚えているかどうかを確かめること」<sup>(8)</sup>など

である。(4)の「ゲーム」は、『泥の中のスケッチ』という活動、『バズ』という集中ゲーム、『中国の箸』という技能ゲーム、ボールを使った競争ゲーム、『セント・ポールの鍵』というグループ活動<sup>(9)</sup>などである。(5)の「他の芸術様式」は、「素話をする、物語を創作する、家紋をデザインする、お化け屋敷に入った時あなたの身に降り懸ることを考え描いてみる、こと、『平和』の曲を作曲すること、収穫の踊りを創作すること、スラム街の写真を撮ること、通行人を撮影すること」<sup>(10)</sup>などである。Boltonは、これらの活動がドラマ活動として行われていることに疑問を持っているのではないかと考える。

第2の「劇的遊び」というドラマ活動は、Boltonによると子どものごっこ遊びとは異なる活動として位置づけられている。Boltonの「劇的遊び」は、「学校において行われる活動で、しばしば教師や子どもたちによってドラマと呼ばれている」<sup>(11)</sup>活動である。Boltonは、「劇的遊び」の具体例として次の6つの活動を上げている。

- (1) 場所の設定：子どもの遊び場、病院、要塞、スーパーマーケット、宇宙船
- (2) 状況の設定：家族生活、学校生活、軍隊生活、野営
- (3) ギャング闘争が起きる設定：カーボーイと先住民、北アイルランド、ドイツ軍と連合軍
- (4) 自然災害が起きる設定：難破船、チョモランマ（エベレスト）山登山
- (5) 物語の筋の設定：『ハーメルンの笛吹き』
- (6) 登場人物づくりの設定：大人を対象とした短期コースで行われる課題例で、参加者は登場人物になり、一週間それを演じ続けることを要求される<sup>(12)</sup>

Boltonは、短い断片的な活動である「エクササイズ」と比較して、「劇的活動」は、活動の内容を考えていると評価している。しかし、「劇的活動」もBoltonが求めている活動ではないと考える。

第3の「演劇」というドラマ活動は、インフォーマル/フォーマルのつながりを持った観客の存在する活動である。Boltonの考える「演劇」は、次のような4つの活動である。

- (1) 主任教師あるいは隣のクラスの子どもたちが、ドラマ活動を見に来る
- (2) グループ同士で即興的劇を見せ合う
- (3) 『ハーメルンの笛吹き』を何回か練習し、大小とフォーマル/インフォーマルな観客に見せるために結末がある作品をつくる

(4) 観客に見せる目的で台本を元に練習する<sup>(13)</sup>

Bolton は、多くのドラマ教師が最終的に上演を目的にした活動を行っている述べている。しかし、Bolton は、これらの3つのカテゴリーに入らないドラマ活動が存在すると主張している。それは、「理解するためのドラマ」<sup>(14)</sup>であると述べている。つまり、Bolton が目指すドラマ活動は、「エクササイズ」でも「劇的遊び」でも「演劇」でもなく、人間とは何かを「理解するためのドラマ」であるとする。

### Ⅲ. Slade と Way のドラマ教育についての批判：5つの「神話」

Bolton は、イギリスのドラマ教育において、影響力を持ってきたSlade と Way のドラマ教育の基本的理論を「神話」と呼び批判している。

第1の神話：ドラマは、行為することである

第2の神話：ドラマは、現実からの逃避である

第3の神話：ドラマ教育は、個人の独創性の発達に関わっている

第4の神話：ドラマは個の発達である

第5の神話：ドラマはアンチ演劇である<sup>(15)</sup>

Bolton が言うこれらの5つの「神話」を検討することを通して、Bolton のドラマ教育の理論を明らかにしていく。第1の「神話」である「ドラマは、行為することである」<sup>(16)</sup>について検討する。Bolton は、ドラマは、行為することではないと主張しているのではない。Bolton は、「ドラマは、行為すること」だけであると捉えられている従来のドラマ教育の考えを批判しているのである。Bolton は、「模倣行為それ自体はドラマではない」<sup>(17)</sup>と述べている。つまり、何かを真似するだけの行為は、ドラマではないということである。Bolton は、「ドラマは、行為であると同時に、行為ではない」<sup>(18)</sup>と述べている。Bolton は、「ドラマの中で学習することは、行為の裏に隠れている普遍的な暗喩である」<sup>(19)</sup>と述べている。つまり、ドラマは行為そのものではなく、行為の裏に存在する象徴的な意味を獲得することであると述べている。

第2の「神話」である「ドラマは、現実からの逃避である」<sup>(20)</sup>について検討する。従来から、「遊び」についての研究者たちが「幼児のごっこ遊びを『極めて重要なこと』を補償することとして、生きていく上での残酷な現実から自分自身を保護するという子どもの本能として見な

している」<sup>(21)</sup>と主張している。彼らのこの考えに Bolton は、疑問を持っている。さらに、広範に浸透している「ドラマは、疑いもなく遊びに繋がっている……ドラマは遊びである」<sup>(22)</sup>という考えを懐疑的に Bolton は見ている。ドラマ教育において、子どもの「遊び」とドラマのつながりを主張しているのは、イギリスのドラマ教育の先駆者である Slade である。従って、Bolton は、イギリスのドラマ教育において広く実践されてきた Slade の方法論を批判していると考える。むしろ、遊びはルールに従うことであるという Vygotsky が指摘した考えに Bolton は賛同している。この考えをもとにして、Bolton は、「『非現実』なごっこ遊びの状況であっても、ルールそのものは、客観的に現実世界を反映する」<sup>(23)</sup>と述べている。つまり、Bolton は、ドラマ活動の目的は「現実からの逃避」はなく、現実世界のルールを獲得するためであると主張していると考えられる。

第3の「神話」である「ドラマ教育は、個人の独創性の発達に関わっている」について検討する。Bolton は、イギリスのドラマ教育に浸透している Slade と Way のドラマ教育の基本である、「ドラマ教育は、個人の発達に関わっている」という考えが、神話であると主張することによって、彼らの理論と方法論を批判している。Bolton は、Slade のドラマ教育の考えを次のように捉えている。「Child Drama という専門用語は、子ども一人ひとりに内在する個人的であるが故に大切である劇的表現の潜在能力を示唆するために使われる傾向がある。教師の責務は、一人ひとりの個性を育てることである。このような子どもに内在するという哲学的子ども観とドラマ観は、西欧において Rousseau に始まり Froebel と Pestalozzi を通し、1967年のイギリスの Plowden Report、それは『児童中心主義教育』に正式認可証を外見上与えたような報告書であるが、この報告書において最高潮に達する大きな教育的傾向の一部と見なされるべきである」<sup>(24)</sup>と Bolton は、一人ひとりの「個性」の尊重という大義名分の持つ弊害を指摘している。Bolton は、児童中心主義を全く否定しているのではなく、アメリカにおける Ward を創始者とする人道的なクリエイティブ・ドラマというドラマ教育が、「教育についての行動主義の妥当性に反対してきた」<sup>(25)</sup>という意味において評価している。但し、アメリカにおいてという前提がついている。Bolton は、「イギリスの児童中心主義運動は、身体的知識の気づきという消極的な受けとめと子どもという永続的なイメージの存在を選択したようである」<sup>(26)</sup>と述べている。つまり、イギリスにおける児童中心主義は、アメリカの教育における意味ある運動として位置づいている児童中心主義のようには、イギリスの教育に意味あるかたちで取り入れられなかったことを Bolton は指摘している。特に、Bolton が、批判していることは、児童中心主義の流行に乗って Way のドラマ教育の理論と方法論が、イギリスのドラマ教師の間で盛んに実践されてきたことである。Way は、ドラマ活動が演劇作品を上演することを目的とせず、

子ども一人ひとりが劇的経験の過程を経験することに目的があると強調した。Bolton は、このWayの基本的考え方とWayのエクササイズを中心としたドラマ教育の方法論を批判している。そして、Wayが「ドラマは人生である」というキャッチフレーズを使ってイギリスのドラマ教育に多大な影響を与えたことについて痛烈に批判している。Bolton は、「個人の独創性」の重要性を否定しているのではなく、ドラマ教育は「劇的経験の過程」による「個人の独創性」の発達のための活動だけではないことを指摘しているのである。Bolton は、演じている一人ひとりだけでなく、「観客の一人ひとりも、自分自身を豊かに深めるために他者と共に意味あることを共有するとき、観客は一時的に個としての自分自身を中断しなければならない<sup>(27)</sup>」と述べている。つまり、ドラマは、個々の演技者と観客の「個性」と「独創性」の発達だけを目的にしたものではないとBoltonは主張している。

第4の「神話」である「ドラマは個の発達である」について検討する。Bolton は、第1の「神話」から第3の「神話」までと同様に第4の「神話」においても、ドラマ教育の一つの目的として「個の発達」を否定しているわけではない。Bolton が批判していることは、ドラマ教師が、子どもたちにエクササイズというドラマ活動によって「集中力、信頼感、感性、グループ意識、忍耐力、寛容、尊敬、判断力、社会性、感情的葛藤の再現、責任感など<sup>(28)</sup>」を教えることができると信じこんでいることに対してである。言い換えれば、これらをドラマ活動を通して教えられると主張したWayのドラマ教育の理論をBoltonは、批判しているのである。Bolton は、これらの獲得は、「劇的経験の副産物として大切なのであって、ドラマにとって本質的なことではない<sup>(29)</sup>」と述べている。つまり、Bolton は、ドラマ活動が「集中力」や「信頼感」など上述したことを獲得するような「個の発達」を目的にしたものではないと主張している。しかし、ドラマ教育を通して「個の発達」が獲得できないとBoltonは、言っているのではない。Bolton は、「個の発達」をドラマ教育の目的として位置づけることを問題視しているのである。

第5の「神話」である「ドラマはアンチ演劇である」について検討する。従来のSladeとWayとの基本的考えであるドラマは演劇と異なるという主張についてBoltonは批判している。Bolton は、子どもの「劇的遊び」とプロの俳優の「演じること (performing)」は、一見類似してみえるが、質的に異なると述べている。Bolton は、子どもの「劇的遊び」と俳優の「演じること」とを二つのカテゴリーに分断するのではなく、両者の関係を連続した連合体としてとらえている<sup>(30)</sup>。従って、ドラマは、演劇と相反するものではなく連続した連合体として繋がっているとBoltonは考えているといえる。しかし、この考えは、古来からの「子どもが演じるために訓練する<sup>(31)</sup>」ことをBoltonは意味していない。Bolton は、ドラマ活動において子

どもが経験していることに着目しているのである。

Bolton は、従来のドラマ教育における問題点を指摘するために「神話」という言葉を使って痛烈な批判を行ったのである。Bolton は、5つの「神話」をすべて否定しているのではなく次のように述べている。「ドラマは狭い意味では、行為することである。ある子どもたちにとってドラマは、悲惨な現実から逃避するために使われることができる。ドラマ教育は、結果的に個人の独創性と発達に関わっている」<sup>(32)</sup>と Bolton は述べている。つまり、Bolton は、イギリスのドラマ教育の新しい潮流をつくりだすために、それまで盛んに実践されてきた Slade と Way の理論と方法論を「神話」という言葉を使用することによって批判したのである。

#### Ⅳ. Bolton のドラマ教育の目的

Bolton は、従来のドラマ活動を上述したように「エクササイズ (exercise)」と「劇的遊び (dramatic playing)」と「演劇 (theatre)」という3つのタイプを上げて説明した。Bolton は、これらのドラマ活動を明らかにすることを通して、個々のドラマ活動に内包する問題点を指摘した。これらのことから、Bolton が求めるドラマ活動は、上記の3つのタイプではないことが明らかになった。そこで、Bolton のドラマ教育の目的について明らかにしていくことにする。

Bolton は、ドラマ活動が「(子どもの) 洞察の変化に関わっている」<sup>(33)</sup>と述べている。この考えは、Heathcote の「ドラマの目的は、ある状況を体験的に生き、そこから洞察を得ること」<sup>(34)</sup>であるというと考えと同じである。Bolton は、上述したように Heathcote の考えとドラマ教育の方法に共感し影響を受けていることから同じドラマ教育の目的を持つことは必然であると考ええる。

Bolton は、ドラマ活動を通して、「理解の変化」に達するために次の4つの段階があると述べている。Bolton の「理解の変化」とは、「洞察の変化」と同義であると考ええる。

- 第1段階： みせかけのドラマ
- 第2段階： 強化すること
- 第3段階： 明確化すること
- 第4段階： 変化すること<sup>(35)</sup>

第1段階の「みせかけのドラマ」について検討していく。Bolton は、「子どもによる経験に

とっての感情の質をもたらさない『みせかけ』のドラマは、課題の知的理解と共存しない<sup>(36)</sup>と述べている。Boltonは、「みせかけのドラマ」の活動例として、Bolton自身が、12歳の子どもたちと行った「ロンドンのペスト」というドラマ活動例を上げている。活動場所は、磨き上げられた床のある大きなホールである。

恐ろしいことに、ペストで死んでいくことは、大変な冒険になった。なぜなら身体的喜びは、死体をピカピカの床の表面に猛スピードで滑らせ、ホールの隅に積み上げ、教師に見つかることなく元気を回復し、死体が復活する十分な時間が与えられる。従って、子どもたちは、再び死ぬことができ、ホールの床を引きずられることを繰り返すことができた<sup>(37)</sup>。

Boltonは、このような活動を「みせかけのドラマ」と言っている。つまり、ドラマ本来の目的が失われ、子どもたちは身体的に快感が得られる行動を繰り返してしまうのである。一人ひとりの子どもは、ペストによって死んでいく人物を演じているように外見上は捉えられてしまう。しかし、実際にはドラマ活動を通して、子どもの「理解を変化」させていない。Boltonは、しばしばドラマ教師による「実際の活動は、もっと微妙なかたちで行われている」<sup>(38)</sup>と述べている。つまり、気づかずにこのようなドラマ活動が行われてしまうことを警告している。さらに、Boltonは、このような活動は、「感情と目的との一致が全くないので理解の変化を導き出すことはできない」<sup>(39)</sup>と述べている。つまり、このような活動を繰り返しても子どもが、「理解の変化」に達することはできず何も獲得できないということである。しかし、Boltonは、このような活動をしてはいけないと述べているのではなく、この「みせかけのドラマ」の段階に留まっていなければならないと述べている。

第2段階の「強化すること」について検討していく。Boltonは、ドラマ活動をする子どもたちが「引き出せることは自分がすでに知っていることだけである」<sup>(40)</sup>と述べている。つまり、「いくつかの要因が変化を産まない限り、ドラマはすでに理解されていることの無意識な反復にすぎない」<sup>(41)</sup>と述べている。この考え方は、Heathcoteの「子どもたちが既に知っているが、それを知っていることに気づいてないことを実際に明らかにしていく」<sup>(42)</sup>というドラマ教育の目的と共通している。Boltonは、「みせかけのドラマ」の段階を乗り越えるために、「ドラマ活動の教育的価値が重要になってくる」<sup>(43)</sup>と述べている。従って、第2段階の「強化すること」において、ドラマ活動を行う上でその教育的価値を考えるドラマ教師の役割が重要になってくる。



第3段階の「明確化すること」について検討していく。Boltonは、「教育的価値として、明確化することが、変化することの中の重要な一部である」<sup>(44)</sup>と述べている。「子どもは、今まで潜在的に保持されてきたある価値を把握することを援助される。言い換えれば、潜在することを明らかにさせることは、ドラマの重要な機能であることは従来からよく知られている」<sup>(45)</sup>と述べている。つまり、子どもは、教師に導かれたドラマ活動を通して、すでに知っているが意識化されていないことに気づくということである。

第4段階の「変化すること」について検討していく。Boltonは、ドラマ活動は「経験的な感情レベルにある時、理解を変えることができる」<sup>(46)</sup>と述べている。言い換えれば、子どもが、ドラマ活動の中でリアリティーを感じる瞬間において、子どもの「理解を変化」させることができる。Boltonは、第4段階の「変化することは、様々なフォームをとりうる」<sup>(47)</sup>と述べている。ドラマ活動における「変化すること」つまり「洞察の変化」は、次のような暗喩的な言葉で表現されてきた。例えば、「純化すること、拡張すること、拡大すること、より柔軟にさせること、先入観を取り除くこと、ステレオ・タイプを打破すること、新しい観点を与えること、挑戦すること、懐疑的になること、前提を疑ってみること、決定に直面すること、二者択一をすること、選択の幅を広げること、見直しを変えてみること」<sup>(48)</sup>などである。一人ひとりの子どもが、ドラマ活動の中でこれらを経験できる活動が、Boltonが求めるドラマ活動であると考える。

Boltonは、第1段階から第4段階の関係について次のように考えている。第1段階の「見せかけのドラマ」から始まり、「見せかけのドラマ」を乗り越えて第2段階の「強化すること」に至ることを行きつ戻りつしながら、子どもは「強化すること」の段階に到達する。次に、同様に「強化すること」を乗り越えて「明確化すること」に至ることを行きつ戻りつしながら、子どもは「明確化すること」の段階に到達する。最終的に、第3段階の「明確化すること」の経験を通して、「変化すること」に至る経験を繰り返すことにより、Boltonの求める「変化すること」が存在するドラマ活動に到達する。つまり、Boltonは、子どもの「洞察の変化」が発生するようなドラマ活動でなければならないと考えている。これが、Boltonのドラマ教育の目的であるといえる。

## V. おわりに

今回は、Boltonのドラマ教育の目的は、子どもの「洞察の変化」を発生させることであることを明らかにした。今後は、さらにBoltonのドラマ教育の目的から方法論を探っていく

い。そして、Bolton と Heathcote との共通点を検討することを通して、Bolton のドラマ教育の方法論の特徴を明らかにしていきたい。また、現在、Slade と Way のドラマ教育の方法論が、衰微してしまった理由についても、Bolton の彼らに対する批判をさらに検討することを通して明らかにしていきたい。

## 註

- (1) 拙者、「イギリスのドラマ教育の考察(1) — Dorothy Heathcote の方法論の検討を通して—」, 『川村学園女子大学』, 第6巻, 第2号, 1995, pp. 121-132.
- (2) Gavin Bolton は、イギリスのドラマ教育における著名な実践者であり研究者である。Bolton は、長年イギリスの Durham 大学でドラマ教育について教えていた。Bolton は、イギリス国内だけでなく、1970年代からオーストラリア、カナダ、アメリカ合衆国、一部のヨーロッパ諸国において、講義およびワークショップを行ってきている。また、イギリス国内においては、地方自治体の現職教師教育に関わっている。初期の頃より Heathcote と共にドラマ教育の実践とその理論化を行ってきている。Bolton は、「昔も今も、Dorothy Heathcote には、友たちとしてまた師として恩恵を受けてきている、これからもこのことが長く続くことを願っている。わたしは、天才である Heathcote にけっして追いつくことはできないが、彼女に追随することを楽しんでいる。」と述べている。ここからは、Bolton の Heathcote に対する深い尊敬と敬愛の念が読み取れる。Gavin Bolton, *Toward a Theory of Drama in Education*, Burnt Mill: Longman, 1979, p. iv, 参照。
- (3) 拙者、「イギリスのドラマ教育の考察(3) — Peter Slade の「Child Drama」の検討を通して—」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第8巻, 第2号, pp. 117-131, 参照。
- (4) 拙者、「イギリスのドラマ教育の考察(2) — Brian Way の検討を通して—」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第7巻, 第2号, pp. 93-109 参照。
- (5) Bolton, Gavin. *Towards a Theory of Drama in Education*, Burnt Mill: Longman Group Limited, 1979, p. 3, 参照。
- (6) *ibid.*, p. 3.
- (7) *ibid.*, p. 3.
- (8) *ibid.*, pp. 3-4.
- (9) *ibid.*, p. 4.
- (10) *ibid.*, p. 4.
- (11) *ibid.*, p. 6.
- (12) *ibid.*, pp. 6-7.
- (13) *ibid.*, p.9.
- (14) *ibid.*, p. 11.
- (15) Bolton, "Drama in Education: A Reappraisal," *Children and Drama*, Second ed., Nellie MaCaslin, ed., New York: Longman, 1981, pp. 178-191, 参照。
- (16) *ibid.*, p. 179.
- (17) *ibid.*, p. 179.
- (18) *ibid.*, p. 180.

#### イギリスのドラマ教育の考察 (4)

- (19) *ibid.*, p. 180.
- (20) *ibid.*, p. 180.
- (21) *ibid.*, pp. 180–181.
- (22) *ibid.*, p. 181.
- (23) *ibid.*, p. 181.
- (24) *ibid.*, p. 183.
- (25) *ibid.*, p. 183.
- (26) *ibid.*, p. 183.
- (27) *ibid.*, p. 185.
- (28) *ibid.*, p. 186.
- (29) *ibid.*, p. 186.
- (30) *ibid.*, p. 187 参照.
- (31) *ibid.*, p. 190.
- (32) *ibid.*, p. 191.
- (33) Bolton, *Towards a Theory of Drama in Education*, p. 41.
- (34) 佐野正之, 『教室にドラマを！—教師のためのクリエイティブ・ドラマ入門』, 晩成書房, 1981, p. 32.
- (35) Bolton, *Towards a Theory of Drama in Education*, pp. 44–45.
- (36) *ibid.*, p. 44.
- (37) *ibid.*, p. 44.
- (38) *ibid.*, p. 44.
- (39) *ibid.*, p. 44.
- (40) *ibid.*, p. 44.
- (41) *ibid.*, p. 45.
- (42) Wagner, Betty Jane. *Dorothy Heathcote: Drama as a Learning Medium*, London: Hutchison, 1979, p. 13.
- (43) Bolton, *Towards a Theory of Drama in Education*, p. 45.
- (44) *ibid.*, p. 45.
- (45) *ibid.*, p. 45.
- (46) *ibid.*, p. 45.
- (47) *ibid.*, p. 45.
- (48) *ibid.*, p. 45.

#### 参考文献

- Adland, David., *The Group approach to Drama 1*, London: Longman, 1964.
- Adland, David., *The Group approach to Drama 2*, London: Longman, 1964.
- Adland, David., *The Group approach to Drama 3*, London: Longman, 1964.
- Adland, David., *The Group approach to Drama 4*, London: Longman, 1964.
- Allen, John., *Drama in Schools: Its Theory and Practice*, London: Heinemann Educational Books, 1979.

- Burger, Isabel., *Creative Play Acting*. New York: Ronald Press, 1966.
- Bolton, Gavin., Gavin Bolton: Selected Writings, David Davis and Chris Lawrence ed., London: Longman, 1986.
- Harters, Jill and Anne Gately., *Drama Anytime*, Maryborough: Primary English Teaching Association, 1986.
- Courtney, Richard. *The Dramatic Curriculum*. New York: Drama Book Specialists Publishers, 1980.
- Courtney, Richard. *Play, Drama & Thought: The Intellectual Background to Drama in Education*, New York: Drama Book Specialists Publishers, 1968.
- Cranston, Jerneral W., *Transformation through Drama: A Teacher's Guide to Educational Drama, Grades K-8*, Hanham: University Press of America, 1991.
- Ghiselin, Brewster. ed., *The Creative Process*, Berkeley: University of California Press, 1952.
- Haseman, Brad and John O'Toole, *Dramawise: An Introduction to the Elements of Drama*, Port Melbourne, 1986.
- Heathcote, Dorothy., *Dorothy Heathcote: Collected Writings on Education and Drama*, Liz Johnson and Cacyly O'Neill ed., London: Hutchinson, 1984.
- 香川良成, 「イギリスの演劇教育」, 『“演劇と教育” 研究報告集』, 日本演劇学会「演劇と教育」研究会, 1994.
- Kase-Polisini, Jodith. ed., *Children's Theatre, Creative Drama & Learning*. New York: University Press of America, 1986.
- 片岡徳雄編, 『劇表現を教育に生かす』玉川大学出版部, 1982.
- Kase-Polisini, Jodith. ed., *Creative Drama in a Developmental Context*. New York: University Press of America, 1985.
- Koste, Virginia Glasgow., *Dramatic Play in Childhood: Rehearsal for Life*, New Orleans: The Anchorage Press, 1978.
- MaCaslin, Nellie, *Creative Drama in the Primary Grade: A Handbook for Teachers*. New York: Longman, 1987.
- MaCaslin, Nellie., ed., *Child and Drama*, second ed., New York: Longman, 1981.
- McGregor, Lynn., Maggie Take and Ken Robinson., *Learning Through Drama: School Council Drama Teaching Project (10-16)*, London: Heinemann Education Books for the Schools, 1977.
- 岡田陽, 『子どものための表現活動』, 玉川大学出版部, 1994.
- 岡田陽, 『ドラマと全人教育』, 玉川大学出版部, 1985.
- O'Neili, Cecily and Alan Lambert., *Drama Structures: A Practical Handbook for Teachers*, Portsmouth: Stanley Thornes Ltd., 1990.
- Pemberton-Billing, R. N. and J. D. Clegg, *Teaching Drama*, London: Hodder and Stoughton, 1965.
- 佐野正之, 『教室にドラマ! 教師のためのクリエイティブ・ドラマ入門』, 晩成書房, 1981.
- Siks, Geraldine Brain., *Children's Literature for Dramatization: An Anthology*, New York: Harper & Row, Publishers, 1964.
- Siks, Geraldine Brain., *Creative Dramatics: An Art for Children*. Seattle: University of Washington Press, 1958.
- Siks, Geraldine Brain and Hazel Brain Dunnington. ed., *Theatre and Creative Dramatics*. Third Printing, Seattle: University of Washington Press, 1974.
- Siks, Geraldine Brain., *Drama with Children*. Second ed., New York: Harper & Row, Publishers, 1983.
- Slade, Peter., *A Introduction to Child Drama*, London: Hodder and Stoughton, 1958.
- Wagner, Jearnine and Kitty Baker., *A Place for Ideas: Our Theatre*, New Orleans: The Anchorage Press, 1977.
- Ward, Winifred., *Playmaking with Children*. New York: Appleton-Century Crofts, 1957.

イギリスのドラマ教育の考察 (4)

Ward, Winifred., *Story to Dramatize*. Corth ed., New Orleans: Anchorage Press, 1969.

Ward, Winifred., *Hooked on Drama: The Theory and Practice of Drama in Early Childhood*, Waverley: Macquarie University Institute of Early Childhood, 1992.

Way, Brain., *Development through Drama*, Atlantic Highlands: Humanities Press, 1967.

Way, Brian., 岡田陽・高橋美智訳, 『ドラマによる表現教育』, 玉川大学出版部, 1977.